
美味なる純血

シクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美味なる純血

【Nコード】

N8760E

【作者名】

シクル

【あらすじ】

主人公山本真の高校で突然残酷な猟奇殺人事件が起こる。次々と殺されていくクラスメイト……。真は事件の真相にたどりつけるのか。

第㊦章「喰事」（前書き）

どうでもいいと思う人は前書きなんて無視しちゃって構いません（笑）

この小説は「小説家になろう」で過去に使っていたアカウントで投稿したものの加筆修正版です。（基本的にはあまり変わってませんが）

投稿する際に非常に迷ったのですがこの作品にはとても思い入れがあり、過去のアカウントで全話投稿しきれなかったので投稿することにしました。

既に全話書ききってあるものに加筆修正し、話を追加するだけなので前作の「く夢は現となりてく」よりも早く更新できるかと思えます。

ちなみに過去のアカウントでの名前は「針金」です。

それでは「美味なる純血」をお楽しみ下さい。

第壹章「喰事」

「真・・・」

李那のかすれた声が聞こえる。

気がつけば李那の目から涙がこぼれていた。

「ありがとう・・・」

そう言うのと李那はそっと目を閉じた。

「ッ!？」

気がつくとそこはベッドの中だった。

「夢・・・か。それにしても変な夢だ」

今ベッドから飛び起きた少年の名は山木真^{やまぎしん}。

やせても太ってもおらず、身長も高くも低くも無い。

普通の高校二年だ。

「んだよ起きちまったじゃねーか。夢ぐれえでピーピー騒ぐんじやねえ!」

隣のベッドで真を怒鳴りつけている男は真桜陽^{まざくらよう}。

肩まで伸びた髪と、髭が特徴だ。

彼は真のルームメイトである。

真のいる学校は寮生活で、真と陽は同じ部屋である。

「おお、悪い。でもそろそろ朝食の時間だぜ?」

真は笑いながら言う。

しかし陽は眉間にしわをよせたまま真を睨んでいる。

「うるせえ。後20分もあんじゃねえか。お前に起こされなきゃまだ後15分ぐらい寝れたんだぞ」

「まあそう言うなって! な?」

真はベッドから降り、服を制服に着替え始めた。

「チッ！わあーったよ。起きればいいんだろ！？」

陽もベッドから降り、制服に着替える。

「それより真。そろそろ来るんじゃないかねえのか？あいつが・・・」

「ああ。そろそろだな」

真と陽がそんな会話をしているうちに廊下からドタドタと足音が聞こえる。

バタンツ！

ドアが勢いよく開けられ、1人の少女が部屋に駆け込んできた。

「しーん！おっはよ！」

彼女の名は山本李那^{やまもとりな}。

左右に縛った長い髪と少し高めの身長が特徴である。

「バッカお前ここ男子の棟だぞ！？毎朝毎朝早くからツ！」

「いいじゃん別に。だって私は真と陽と一緒に朝ご飯食べたいんだもん」

「だったら食堂で会えばいいだろ・・・」

真は呆れて呟いた。

「何か言った？」

「別に」

真はそっけなく答え、制服の上着を着た。

「それより・・・早く食堂行こ！」

「ハイハイ・・・」

李那を先頭に真と陽は部屋を出て食堂に向かった。

真達が男子の棟を出て食堂へ向かう廊下を歩いている途中だった。

1人の少女が真達の前に立ちふさがった。

「そのあなた。どうして女子のあなたが男子の棟から出てくるのかしら？」

「出た。アホ木・・・」

「真桜君は黙っててくれない？」

少女にギロリと睨まれ流石の陽も言葉を失った。

彼女の名は浅木優^{あさきゆう}。

黒縁眼鏡と短めの髪が特徴だ。

彼女は真達のクラスの学級委員長で、何かと規律に厳しい。

「あたしはその娘が^こどうして男子の棟から出てきたのかって聞いているの。校則では禁止されているはずよ？」

「まあそうかたい事言うなって！だからガチガチ委員長って言われんだぜ？」

真がケラケラと笑いながら言うとうちは優は真を睨みつける。

「あ、すいません」

圧倒された真は黙ってうつむいた。

「で、どうなの？」

「え、えーと・・・」

李那は困ったようにうつむき考え込む。

「あら。そろそろ朝食の時間だわ。悪いけど失礼させてもらおうわ」
そう言っって優はスタスタと食堂の方へ歩いて行っった。

「おっかねえな・・・。大丈夫か？李那」

真と陽が李那の方を見ると思いの外笑顔だった。

「うん、大丈夫だよ。早く食堂行こう？」

「ああ」

真達は食堂へ向かって行っった。

「ねえ。何食べる？」

李那は嬉しそうにメニューを眺める。

「そーだな・・・。じゃあ俺は米だけで良い。梅干しもあるしな」
陽が髭をさすりながら言う。

「やっぱお前和食なのな・・・。どれだけ梅干し好きなんだよ・・・」

「

「やかましい！人の好みをとにかく言うな！それにこの梅干しはうちのばあさん特製の・・・」

「あー。わかったわかった。もういいよその話は」

真は陽をなだめるように黙らせた。

確かに陽の持っている梅干しは彼の実家から送られてきたもので、市販のものよりはるかにおいしい。

「じゃー私はねー……。オムライスとチャーハンとラーメンとカレーライスとうどん！」

「相変わらず大食いだな……。炭水化物ばっかだし」

「えへへ……」

李那は少し恥ずかしそうに笑った。

「真はー？」

「俺は目玉焼きと米で良いよ」

「じゃあ俺が全員分頼んでくる」

そう言って陽は席から立ち上がった。

「おお。そうか悪いな」

陽が立ち去った後、優が真達の机に近づいてくる。

「あら、席空いてるわね。ここいいかしら？」

優が陽の座っていた席を指さす。

「悪いな。ここ陽の席なんだ……。他あたってくんねーかな？」

真が申し訳なさそうに言くと、優は少し頬を赤らめた。

「べ、別にいいわ。他の席を探すから……」

「そっか。悪いな」

真がそう言くと優は近くの空いている席を探し、そこに座った。

それから数秒たった頃、陽が席に戻ってきた。

「もう少し待っててよ。山本、お前頼み過ぎだ」

陽が呆れたように言う。

「仕方ないじゃん！全部食べたかったんだもん！」

「そういう問題か？っつーか太るぞ？」

真は半笑いで言う。

「もー！馬鹿！」

そんな他愛のない会話をしているうちに食事が運ばれてきた。

真達の机に大量の料理が運ばれてきた。といってもほとんどは李那

の物だが。

「やったー！いただきまーす！」

そう言って嬉しそうに目の前の料理を食べる李那を見て、真と陽はやはり驚かされているのだった。

「あー。駄目だあたし……。今日も山木君に何も言えなかった……」

放課後、自分の部屋に戻った優はため息をつく。

「あたし山本さんに嫉妬してるのかな……。今日もつらくあたっちゃったし嫌な女だなあ……。あたしって……」

そう言って優はベッドに倒れ込んだ。

「遅いな……。魅華^{みか}……」

優がそう言ってもう一度ため息をついた時「ガタッ！」と物音が聞こえた。

「誰？魅華？」

優がそう言って周りを見渡した時はすでに遅かった。

背後から感じる威圧感。

優の背後で何かがうごめいている。

「！？」

優が振り向くと同時にその何かは優の首筋にガブリと喰いついた。恐怖を感じる暇さえ、その何かは与えてくれなかった。

そのままその何かは首を喰いちぎった。

悲鳴すらあげさせず……。

今まで胴体に接続されていたその首は無惨に宙を舞い優のベッドの上に転がり落ちた。

そしてその何かは優の体に喰いつき、むさぼるように喰った。

飛び散る鮮血。

転がる肉片。

残酷にも少女の体は血塗られた肉片へ変わっていった。

残ったのは首と喰い散らかされた肉片だけだった。

何かは満足したのか、部屋の窓から飛び降りて行った。
それから数分後のことだった。

ガチャリとドアが開き、中に少女が入ってくる。

魅華だった。

「な、何よこれ・・・」

「優ッ！！！！」

魅華は無惨に喰い散らかされた優の体を泣きながら見つめていた。

続く

第貳章「不審」

朝。

目をさました真はどことなく嫌な予感がしていた。
具体的にはわからないがとにかく嫌な感覚。

「何だろう……。嫌な予感がする……」

真が隣のベッドを見ると珍しく陽は既に目を開けていた。

「……。珍しいな。もう起きてんのかよ」

「まあな……。何か知らんが目が覚めた」

「何でベッドから出ないんだよ？」

「まだちょっと眠い」

陽は眠そうなまぶたをゴシゴシとこすっている。

「そろそろ時間だぜ？」

「わぁーったよ。起きりゃいいんだろ？」

陽は不機嫌そうに言うのとベッドから降り、制服に着替え始めた。

「なあ陽。今日は何か嫌な予感がしねえか？」

真がベッドから降りながら言うのと、陽は眠そうにあくびをしながら答えた。

「ああ？別にしねえよ……。でもお前がそう言う時は大体ろくな事がねえのは確かだが……」

ベッドから降りた真も制服に着替えた。

「今日はいつこねえのか……？」

「さあな。どっちにしたって途中で会うだろ？」

着替え終わった真と陽は後部屋を出て食堂に向かった。
しかし珍しく2人は李那に会わなかった。

「何であいつ今日いねえんだよ？」

真がそう言いながら食堂の席に座る。

「あいつが調子崩すなんて事あんのか？」

「いや、ないだろ……」

真が笑って答えると隣に気配を感じた。

「おはよ！おいてくなんてひどいよお・・・」

「李那ッ！」

真の隣にはまだ眠そうな李那が立っていた。

「・・・。寝坊したのか？」

「うん」

李那が恥ずかしそうにうなずくと、陽は「ガハハ！」と笑った。

「早起きのお前でも寝坊する事があんだな！」

「もう・・・！私だって眠い時はあるんだよ！」

真がふと近くの机を見ると、1人の少女がさみしそうに座っていた。

「おい、陽。あいつって確かいつも浅木と一緒にいた奴だよな？」

「ああ。確かな。名前は・・・」

「卯月うづきさんだよ」

李那が思い出したように言うと言陽もやっと思ひ出したようだ。

彼女の名は卯月うづき 魅華みか。

優とは対照的に長い髪と内向的な性格が特徴である。

「何であいつ今日1人なんだよ？」

真が李那に尋ねると李那は首をかしげる。

「わかんない」

「ま、いっか」

「それより早く何か頼もうよー！」

「真、今日はお前が行って来い。俺は米だけで良いぞ」

「わかった」

そう言いながら真は食べ物を注文しに行った。

いつも通りの笑い声の絶えない教室。

しかし真だけはその教室に少しだけ違和感を感じていた。

「どーした山木！何かあったのか？」

「え？いや別に何もねーけど・・・」

真に話しかけてきた少年の名は海原^{うなばら}太一^{たいいち}。

丸坊主の頭と長身が特徴だ。

彼は真と仲が良く中学時代からのつき合いだ。

「いや！その顔は何か考え事をしている顔だ！」

太一は何故か真の感情を表情で読みとることが出来る。

付き合いが長いせいなのだろうか・・・？

「ふう・・・。何でお前は俺の考えが読めるんだよ・・・。」

真は呆れたようにため息をついた。

「で？で？何について考えてたんだよ？好きな娘^こでも出来たのか？」

太一は真の顔を下から覗き込むようにして尋ねる。

真はうっとおしそうに顔を上げ、太一の頭を軽く叩いた。

「痛ェ！何でぶつんだよ！？」

「うっとおしい」

そんなやりとりをしているうちにチャイムが鳴り響いた。

「おッ！？俺席帰るわ！」

太一は走って席に帰っていった。

太一が席に座ると同時に先生が教室に入ってきた。

「号令をしてください。」

彼女の名は小島^{こじま}真央^{まお}。

後ろで縛った髪と眼鏡が特徴で、性格はいたって冷静沈着。

そして生徒に対してかなり厳しい事から「こじまおう」と影で呼ばれている。

「起立！」

（あれ・・・？）

真は1つの空席に気がついた。

ソレに号令はいつもあいつだったハズ・・・。

「礼！」

「着席！」

全員が席に着く。

真は空席を見つめ、その空席が誰の物かわかった。

(浅木……!?)

「出席をとります。」

そう言っつて小島は出席簿を出した。

「……卯月さん。」

「は、はい……」

魅華が返事をすると同時に太一が「先生!」と叫ぶ。

「何ですか?」

「浅木さんは休みですか!?!」

「……はい。彼女は授業を欠席しています」

「それでは続けます」

(真の言っつてた嫌な予感っつてこれの事か……?)

陽は少し不思議そうに真を見ていた。

放課後。

魅華は職員室にいた。

「では卯月さん。あなたはこの件については何も知らないんですね?」

「はい……。私が部屋に入った時には既にあの状態で……。その時ちようど真と陽は未提出だった宿題を提出しに職員室に向かっつていた。」

「あのこじまおう絶対キレルぜ?」

真が笑いながら言っつと陽も笑いながら言い返す。

「だな。でもお前も怒られるんだぜ?」

「まあそれもそうだな」

職員室のドアの前に来た真と陽は中からヒソヒソと話し声が聞こえる事に気がついた。

「おい、ありゃうちのクラスの卯月とこじまおうの声だぜ……」
陽が真にささやくと真は真剣な顔で頷いた。

「それでは、あなたが部屋に戻った時には既に浅木さんは殺害されていたのですね？」

「!？」

真と陽は正直自分の耳を疑った。

昨日は元気だった彼女が、今日は休んでいただけの浅木優が・

・・・

殺害されていたとは夢にも思っていなかったからだ。

「しかし何故臓器がなくなっているんだ・・・？」

教員のそんな呟きが、真達にも聞こえた。

「マジ・・・かよ・・・」

陽が呟いた時、職員室のドアが開き、魅華が外に出ていった。

真と陽はあたかもさっきここに来たように装い、職員室へ入った。

続く

第参章「疑惑」

「おかしい。何か引っかかる……」

陽と部屋に戻った真はベッドの上で呟く。

「何がだよ？」

「何がって……。殺人が起こったって言うのに何でこの学校はいままで通りなんだよ……」

「只今捜査中って事なんじゃねえか？」

陽が眠そうにあくびをしながら言う。

「捜査なら警察に任せればいいだろう？ 何で警察を介入させないんだよ……」

「それに、何が理由で浅木が殺されなきゃなんないんだ……？」

「ソレに、臓器がなくなってる……って殺人事件……。どっかで聞いたことあるような……」

「さあな……。俺には何もわからねえ。だがこれだけはわかる。俺達が首を突っ込むような事じゃない。こういう事は学校や警察に任せるべきだ」

そう言うと陽は浴室の中へ入っていった。

「何が起こってんだよ一体……」

その頃……。

魅華は宿直室に居た。

彼女の部屋は今だにあの状態のままで、使う事が出来ないからだ。きれいにしたとしても使う気にはなれないだろう。

「卯月さん。シャワー、先に浴びてきたら？」

小島がそう言うのと魅華は何も言わずにうなずき、浴室へ向かった。中に入ってドアを閉め、制服を脱ごうとした時だった。

「!？」

何かの気配を感じる。

「誰!？」

魅華が振り向くと小島が立っていた。

「……先生」

「ごめんね驚かせちゃって……」

「いえ、私の方こそごめんなさい」

小島は手を洗った後、すぐに出ていった。

「ふう……。疲れてるのかな……。？」

魅華が再び制服を脱ごうとした時だった。

「……。!？」

やはり気配を感じる。

「だ、誰よ……。!？先生……。？」

これが魅華の発した最後の言葉だった。

魅華は突然背後から何か飛びつかれた。

「!？」

言葉を発する前に喉に噛みつかれた。

魅華の喉から真っ赤な血がドボドボとこぼれ落ちる。

（喉が……。声が……。出ない……。!）

魅華の喉からは絶え間なく血が流れている。

背後から飛びついていて何かは魅華の背中から降りた。

そして魅華を前から押し倒し、腹部に思い切りかぶりついた。

（う……。あ……。ッ!？）

何かは貪るように魅華の体を喰い始めた。

辺りには血が飛び散っていた。

魅華……。いや、これはもう魅華と呼べるものではなかった。

原型をとどめていないのだ。

唯一首以外は。

苦痛に歪んだまま魅華の首はコロコロと転がった。

その何かは満足したらしく、窓から外に出ていった。

「シャワー。長いわね・・・」

不審に思った小島は浴室のドアをガチャリと開けた。

「卯月さん・・・？」

「！？」

小島は今の浴室の光景に絶句した。

「い、いやあああああああッ！！」

小島は驚きのあまり、その場にペタリと座り込んだ。

「どうしましたッ！？」

小島の悲鳴を聞きつけた他の教員が宿直室のドアをドンドンと叩く。

「開けてくださいッ！どうしたんですか！？」

今の小島にはそれすら聞こえていなかった。

ガチャガチャと鍵を開ける音がする。

マスターキーを使ったのだろう。

「小島先生ッ！？」

ガチャリとドアが開き、他の教員達が入ってくる。

「な・・・どういう事だこれは・・・！？」

1人の男性教員が放心状態の小島と魅華の死体を見ながら言う。

「なんて事だ・・・。二人目の犠牲者が・・・」

翌朝、目を覚ました真はすぐにベッドから降り、制服に着替え始めた。

「んあ・・・。何でそんな早いんだよ・・・？」

今日覚めたばかりであろう陽はとても眠そうに真に問いかける。

「ああ。ちよっとな・・・」

真は着替え終わると陽に「遅れるなよ」と言い残しすぐに部屋を出た。

「なあーに焦ってんだあ・・・。あいつあ・・・」

陽は頭をボリボリとかきながら、ベッドから降りた。

陽が制服を着替え終わり、真を追いかけようとした時、ふいにドア

が開いた。

「・・・。山本か」

「おはよう。陽！真は？」

「あいつぁ先行ったぞ」

「えー。3人で行きたかったのに・・・」

「まあ食堂で会うだろ。行くぞ」

「うん！」

その頃P Cルーム。

P Cルームと言うのはパソコンの置いてある部屋の事で、技術の授業などで使われている。

真は早朝から先生の許可を取り、P Cルームで調べ物をしていた。

カタカタカタ・・・

真のキーボードを打つ音が部屋に響く。

「・・・」

カタカタカタ・・・

「やっぱり・・・。似ている・・・。残虐性、猟奇性においても・・・」

「」

「半年前の事件と・・・」

「Z県高校生連続惨殺事件・・・」

「被害者の殺害された順番がそのクラスの出席番号順になっている・・・」

「・・・」

「浅木の出席番号は・・・1番」

真がふと時計を見ると食事の時間が近づいていた。

「・・・。もうこんな時間か・・・」

真はパソコンの電源を切り、P Cルームを出て食堂へ向かった。

続く

第四章「殺戮」

P Cルームを出た真は真っ直ぐに食堂へ向かった。

陽と李那が待っていると思っただからだ。

食堂についた真はすぐに陽達を探した。

「真。どこ行ってたんだ？」

後ろから肩を叩かれ、振り向くとそこには陽と李那が立っていた。

「陽、李那」

「もー！心配したじゃん！」

「悪い悪い。ちよつとな」

「お詫びに俺飯頼んでくるよ。いつもと一緒に良いよな？」

真が尋ねると陽は小さく頷いた。

「ああ」

「私も良いよー！」

「了解」

真は軽く答えるとすぐに食事を頼みに行った。

（過去の事件・・・）

（それと酷似した今回の事件・・・）

（と言う事は犯人は・・・同一人物・・・？）

真が考え事をしながら歩いているとドン！と何かにぶつかった。

「！？」

「ああ。すまない。急いでいるんだ」

「あ、すいません」

真が前を見ると、若めの男性教師が立っていた。

彼の名は石川雄平。いしかわゆうへい

去年教員免許を取り、今年この学校に来た新米教師である。

ちなみに彼の教科は数学である。

（何を焦っているんだ・・・。授業はまだ始まる時間じゃないし・・・

・)

石川は猛ダッシュで男子の棟のある部屋の前に来ていた。部屋の前には他の男性教員も立っていた。

「ハアハア……。すみません。遅くなって……」

「いや、かまわないよ」

そう言ったのは校長だった。

「それよりこの部屋の中を見てくれ……」

校長が部屋のドアを開けると、ドアの反対側は血まみれだった。

「!？」

「こ、これは……?」

部屋中には血が飛び散り、床には2人の少年の首と血まみれの肉塊が転がっていた。

「昨日の夜殺害されたようです……」

石川は血まみれの床に転がっている2人の少年の首を見た。

「この子は……。B組の海原君と小河君……」

「そうだ。そして一昨日B組の浅木さんが殺害されたのは知っているね?」

「はい。」

「そしてそのルームメイトの卯月さんも昨日殺害されている」

「もう既にB組だけで四人も殺害されているんだ」

「え……?」

「何故警察に連絡しないんですッ!？」

石川がそう言うのと校長は少しうつむいた。

「警察を介入させると厄介な事になる。それに殺人事件の起きた学校に誰が入学すると言うんだ? そんな学校の評価を落とすような事はできない」

「そ、そんな!？」

「もしこの学校がなくなりでもしたらどうするんだね!? 私はおろ

か、君たちだって収入がなくなるんだぞ？」

「しかし校長ッ!!」

石川が語気を荒げる。

「まあ良い。とにかく警察には通報するな。この事件は学校で解決する」

校長はそう言うのと部屋を去っていった。

その頃食事の終わった真達は教室の中にいた。

「・・・」

真は不審に思っていた。

いつもなら太一が話しかけてくる頃なのだが今日はそれがなかった。

「おかしいな・・・」

キンコンカンコンコン!

チャイムが鳴り響き、全員が席についた。

教室のドアがガラガラと開き、石川が入ってくる。

「・・・!？」

「えーと小島先生は体調が悪いためお休みです。代わりに僕が今日は担任をします」

「号令をお願いします」

石川がそう言うのと「起立!」と声がする。

「礼!」

「着席」

号令で全員が席に座った。

「それでは出席をとります。今日は四人休みです」

石川がそう言うのと真は咄嗟に太一の席を見た。

(・・・。休み!?)

(やはり卯月も・・・。それに小河まで・・・?)

真は自分の中の嫌な予感を抑え切れなかった。

放課後

HRが終わると真はいつもなら陽と部屋に帰るのだが今日は先にする事があった。

「おい。工藤」

そう。出席番号5番の工藤に用事があったのだ。

「？」

工藤弘幸。
くどうひろゆき

低めの身長と少し地味な所が特徴で、真の中学時代の同級生でもある。

「山木君？何？」

「工藤。お前のルームメイトって誰だ？」

「僕の・・・？田川君だけど」

「お前。今日は田川と離れるな。常に誰かというんだ！」

「え・・・？」

突然語気を荒げる真に、弘幸は少し戸惑った。

「何か嫌な予感がするんだ」

「ん・・・。わかったよ。山木君がそう言うなら気をつけるよ」

弘幸はニコリと笑って頷いた。

「そうか・・・」

「しーん！はーやーくー！」

李那の呼ぶ声が聞こえる。

「ああ。今行くー！」

「じゃあ工藤。またな！」

「うん」

真は弘幸に別れを告げた後、すぐに李那達の元へ行った。

夜。

弘幸はルームメイトの田川と部屋の中にいた。

「田川君。僕そろそろ寝るね」

「ああ」

彼の名は田川誠。
たがわまこと

太っていて眼鏡をかけたいわゆるポツチャリ系の少年だ。

「あ、ちよっとその前にトイレ」

そう言うのと弘幸は部屋のトイレへと入っていった。

弘幸はトイレに入るとまず鍵をしめた。

別に恥ずかしいわけではない。

トイレに入るとまず鍵をしめる。

それが彼の癖だった。

この狭いトイレ、人がギリギリ2人入れるぐらいのトイレだ。便器の上にちよっとした窓がある。

「ふう」

用を足した弘幸が外に出ようとした時だった。

何かの視線を感じる。

咄嗟に弘幸は真の言葉を思い出した。

何か嫌な予感がするんだ。

弘幸は恐る恐る後ろを振り向いた。

「何だ……。何もいな……」

「!?!」

一瞬何もないかと思ったが実際そうではなかった。

よく見ると、窓の外に人影のようなものがあつた。

本来ならあり得ない。

こんな高い場所に人間が外から上がってこれるわけがない。

あり得ないはずなのだが実際にここにあり得ている。

人間が、あるいは人間の形をした何か窓からこちらを見ている。

「……!?!」

その何かは窓をゆっくりと開け、ズルズルとこっちへ来る。

弘幸の本能が弘幸に警告している。

逃げろ。

しかしあまりの恐怖に弘幸は声も出ない。

「あ、ああ……」

足はガクガクと震え、目からは涙が溢れている。

その何かは完全にこっちに入り、弘幸をじっと見ている。

「フフ、フ・・・フフ・・・」

何かは不適に笑い、弘幸の首を絞めた。

「!？」

ギリギリとものすごい力で何かは弘幸の首を絞めあげていく。

そして弘幸が動かなくなったのを確認し、腹部にガブリと噛みついた。

何かはムシャムシャと腸を貪り喰った。

「大便にしたって遅すぎないか・・・？」

その頃部屋では誠が弘幸を心配していた。

最初はあまり気にしていなかったのだがもうかれこれ5分はたつ。流石に不審に思った誠はトイレのドアを叩いた。

「おい。いつまでしてんだー？」

返事がない。

「おい！無視するなよッ！」

やはり返事がない。

誠はだんだん不安になってきた。

誠は耳をすました。

中から何かグチャグチャと音が聞こえる。

何かを引きちぎるような・・・そんな音だった。

「ひ、弘幸・・・？」

誠はすぐに部屋の電話で先生を呼んだ。

数分後に石川が到着した。

「田川君・・・！」

「い、石川先生・・・。弘幸が・・・」

それを聞いた石川はトイレのドアを開けようと、ノブをガチャガチャと回す。

「駄目です先生。鍵がかかっているんですッ！」

「そうか・・・。なら力づくで・・・！」

石川はトイレのドアから少し離れ、助走をつけて思い切り突撃した。

バキッ！と音を立ててドアが割れた。
最初に二人の目に入ったものは引きちぎられた腕だった。
明らかに弘幸のものである。
壁や床には血がベツトリと付着している。
便器の上には弘幸の首が乗っていた。
その顔は恐怖に歪んでいた。

続く

第伍章「加速」

早朝。

職員室で職員会議が開かれた。

もちろんあの件についてだ。

「何か意見のある人はいますか・・・」

校長が言うと、すぐに石川が手をあげた。

「石川君」

「何度も言うようですが、警察に通報するべきです！これは我々の解決できる範囲ではありません！」

「私も何度も言います。警察を介入させる訳にはいきません」

「しかし・・・！」

「その意見には・・・私も反対だ」

突然石川の反対側の席から声がする。

「富山先生・・・」

「今さら警察に通報してどうする？亡くなった命は今さらかえらないというのに・・・」

「これ以上の被害を止めるためですッ！！」

「果たして警察にこの事件が止められるとでも言うのか！？」

「止める、止められないの問題ではありません！止めなければなら
ないんです！」

ガタンッ！

石川は勢いよく席から立ち上がる。

「・・・。石川君。少し落ち着きたまえ」

校長が静かに言うと、石川は「すいません」と言い、席に座った。
その後会議は難航し、結局何も解決しないままに終わった。

会議が終わると、石川は「ふう」とため息をつきながら職員室を出
た。

その頃教室。

真は教室を見渡し、やはり人数が減っている事に気がついた。

(工藤……。それに小坂と佐々木まで……)

結構ノンキに考えていた陽も流石に同様に隠せない。

「真、何か考え事？」

李那が心配そうに真の顔を覗き込んだ。

「ああ、このクラス……。昨日より人数が減ってないか？」

「そういえば……。そうだね。浅木さんもこないだからずっと休みだし……」

真は浅木が殺害された事や、恐らく他の休んでいる生徒も殺害されているかも知れないことを李那には話していない。

彼女を怖がらせたくないのだ。

「私、なんだか嫌な予感がする……。とても怖い……。」「……」

真としては「大丈夫だ」と言っただが何とも言えない。
キーンコンカンコン!

突然チャイムが鳴り響き、全員が席についた。

数秒ほどたつと、小島が教室に入ってきた。

どうやら復帰できたようだ。

「号令をお願いします」

「起立！」

「礼！」

「着席！」

ガタガタッ!

号令が終わると、真は改めて教室を見渡した。
もう既に7人もいない。

「はい。それでは出席を取ります」

「笹川さん」

「はい」

真は恐らく次の犠牲者となるであろう彼女を見つめた。

ささがわ ちか
笹川千香。

少し高めの身長と、後ろで1つに縛った髪が特徴だ。

こんな平凡な少女がこれから無惨な死に方をするとは思えない。
しかし実際にそうなるのだ。

奇妙だが真には確信があった。

朝のHRが終わると真は千香に話しかけた。

「なあ・・・」

「何？」

「あのさ。今日は1人になんない方が良いと思う・・・ぜ？」

「何それ？どういう事？新手のナンパ？」

「いや、そうじゃなくてさ・・・」

「そう。ならどこかへ行ってくれるかしら？目障りよ」

「な、なんだとッ！？」

「本当の事を言っただけじゃない。何を興奮しているの？」

千香は「フン」とそっぽを向くと、席を立った。

「用が済んだのならどけてくれるかしら？次は移動教室なの」

「あ、ああ」

真がどけると千香は授業道具を持ち、機嫌悪そうに教室を出ていった。

「チッ。人が心配してやってんのによお・・・」

真はすこしふてくされた顔で授業道具を用意した。

「遅えぞ」

「あ、悪い悪い。今行くよ！」

真は急いで陽と教室を出た。

「ごめん、私トイレ」

「じゃあ先行ってるね」

「うん」

千香は2人の友人と別れると、トイレへ入っていった。
ふと、真の言葉を思い出す。

だが千香はあまり気にしないことにした。

用を足すと千香はトイレの個室から出ようとした。

その時だった。

ペタ・・・ペタ・・・

素足で廊下を歩く動くような音がする。

「!？」

音は近くから聞こえた。

怖くなった千香はすぐにでもこの場を離れたかったが、出る気にはなれなかった。

音は次第に近くなってくる。

「何・・・この音・・・」

全身が震えているのがわかる。

怯えているのだ。

自分では落ち着いているつもりなのだが、ソレとは関係なく体は震えている。

ペタ・・・ペタ・・・

音は、止まった。

少し安心した千香は個室から出ようとして、ノブに手をかけた。

「ん・・・!あれ？」

開かない・・・という訳ではなく、何か重たい。

裏側で何かノブに乗っているような・・・

千香は上を見た。

何故だかはよくわからない。

最初に目に入ったのは垂らされた長い髪。

長い髪が上から垂らされているのだ。

長い髪に隠れてよくは見えないが、人の頭があった。

そこから長い髪は垂らされている。

人間・・・なのだろうか？

ソイツは個室の中に飛び降りてきた。

千香は、握ったままのノブが軽くなったことを感じた。

「だ、誰・・・!？」

自分でもわかっていた。

その質問が何の意味も持たないことに。

ソイツはガブリと千香の肩に噛み付いた。

「あっ・・・!」

肩の肉を喰いちぎると長い髪を振り乱し、喉に噛み付いた。

そして、腹部に喰いつく。

貪るように喰う。

そして一通り喰い尽くしたあと奇声を発して、その場所から出て行った。

続く

第六章「恐怖」

「・・・」

真はベッドの上で考え込んでいた。

陽もただ座っているだけで何も話さない。

無理もない、あんな事件の後なのだから。

真と陽が教室に帰るとき、女子トイレの中に複数の教員が入っていた。

教員達の中から聞こえた「笹川」という名前が真にこれが事件と関係あることを悟らせた。

恐らく笹川は殺されたのだろう。

その後、全生徒が教室に集められ、緊急H Rが開かれた。

内容は「笹川千香の死について」。

ほぼ全ての生徒が恐怖し、怯えた。

先生の「何か知っている人はいないか？」という質問も全く意味を成さない。

パニック状態だった。

その後、生徒は全員部屋へ強制的に戻された。

死体は教員達が回収し、今は職員室で緊急職員会議が行われている。

真は「フウ・・・」とため息をついた。

落ち着こうと思うのだがなかなか落ち着かない。

陽と何か話そうかとも思ったが、話す事が見つからない。

そんな状態だった。

部屋はしんとした静寂だけで、音を発する物はないもなかった。

真は部屋の片隅にあるノートパソコンに気がついた。

古い機種だがまだ使える。

そういえば陽が家から持ってきていたのだ。

「なあ、陽」

「ん？」

「あのパソコン、ネット繋がってるっけ？」

「ああ、確かな。それがどうした？」

「ちよっと使っても良いか？」

「ああ」

真はすぐにベッドから降り、ノートパソコンの電源を入れた。

「お前、何をする気だ？」

「ちよっと調べたいことがあるんだ」

「こんな時にか？」

「ああ」

真は起動したのを確認すると、すぐにネットに繋いだ。

陽は真の後ろからパソコンの画面を覗き込んだ。

真は検索サイトを開き、なにやらカタカタと文字を打ち始めた。

「Z県高校生連続惨殺事件」

「あったな。そんな事件も」

「似てないか？」

「何がだ？」

「今回の事件と・・・」

真は事件について詳しく書かれたページを開いた。

「ほら、ここ見て見ろよ」

「・・・」

「被害者の殺害された順番が出席番号順なんだ。」

「待てよ。今日殺されたのは笹川だぞ？確かに最初は浅木だが・・・

・・・。他の奴が殺されてるとは限らないだろ」

「いや、恐らく殺されてる。でないと7人もの生徒が理由もなしに

休むとおもうか？」

「まあ、そりゃそーだが・・・」

「じゃあ、次の犠牲者は・・・」

「確か・・・。鈴木だ。鈴木明」

それを聞いた瞬間陽が突然勢いよく立ち上がった。

「明ッ!？」

「お、おいどうしたんだよ？いきなり興奮して・・・」

「こうしちゃいねえ・・・！」

そう言うとき陽はすぐに部屋を飛び出して行った。

「お、おい陽ッ！」

真がそう叫んだ頃には既に遅く、陽はどこかへ行ってしまった。

その頃・・・。

鈴川明は怯えていた。

クラスメートが1人殺されたのだ。

無理もない。

ベッドの片隅でビクビクと震えていた。

そんな彼の様子を細木雅夫は不安そうに見ていた。

「明。大丈夫か・・・？」

雅夫の呼びかけにも答えず明は震えている。

（陽・・・！僕、怖いよ・・・！！）

明は陽の親友だった。

というよりも、明が陽を慕っていた。

過去、彼はいわゆるいじめられっ子だった。

そんな彼を助けたのが陽だった。

それから2人は仲良くなり、陽は明にとって兄のような存在となっていた。

陽自身も明の事を放っておけないようになっていた。

「ちよつと俺トイレ行って来るわ」

雅夫はそう言うときトイレの中へと入っていた。

明の震えは1人になったとたん大きくなった。

（怖い怖い怖い怖い怖い・・・）

ガシッ！

「！？」

明は突然足に違和感を感じた。

明はその違和感がなんなのかなんとなくはわかっていった。

しかし怖くて確認する事が出来なかった。

（ま、雅夫君が帰ってきてから確認しよう・・・。）
ズリズリッ！

明がそう思ったのもつかのま、明はその違和感にベッドの下に引きずり込まれてしまった。

「ヒッ！」

ベッドの下は真っ暗でなにも見えなかった。

その暗闇が、明にはとてつもなく怖かった。

明はすぐにベッドから出ようとしたが、すぐに何かに足を掴まれた。
「!？」

やはり思った通りだ。

先程の違和感の手だったのだ。

足を手で握られていたのだ。

そう。

今だって握られている。

ガブリッ！

腹部に激痛が走る。

噛みつかれたらしい。

痛みと恐怖でもう声も出ない。

しかしすぐに痛みは消えた。

消えたと言うより感じられなくなったと言った方が正しい。

その何かは明の腹部をどんどん喰っていった。

腸を喰い終わるとその何かはベッドからはいずり出て、ベッドの近くの窓を開け、飛び降りていった。

数秒後、雅夫は用を足し終わり、トイレから出てきた。

「あれ・・・？明・・・？」

雅夫は部屋の中を見回すが、明はどこにもいない。

「・・・」

ふと雅夫が下を見ると、なにやら赤い液体が見えた。

「う、うわあああああああああッ!!!!!!!!!!」

そしてやはりゴロリと転がる少年の首。

「明アアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

バタンッ!

突然部屋の中に陽が入ってきた。

しかし、陽が入ってきた時にはもう明は首だけだった。

「明・・・・・・」

陽はその場に立ちつくし、明の首を見つめた。

続く

第七章「帰宅」

「明・・・」

陽は立ち尽くしたまま明の首を見つめ、雅夫は放心状態のままだった。

「何で・・・何でだよ・・・？」

その頃職員室ではまた職員会議が開かれていた。

「だから言ったじゃないですかッ！早く警察に連絡するべきだとッ！」

職員室に石川の声が響く。

「け、警察にはさつき連絡しておいたよ。落ち着きたまえ石川君」

「落ち着いていられるわけないでしょう！？これで8人目ですよ！？」

「それに今度は死体を生徒が目撃しています！どう収拾するつもりなんです！？」

かなりの勢いで石川が喋るので、校長も焦っている。

「石川先生。校長をせめても解決しません。落ち着いて下さい！」

小島が必死に石川を止めた。

「す、すいません。ついカッとなってしまいました・・・」
石川はそう言うのと静かに席に座った。

「それより校長。彼の言う通り、どう収拾をつけるおつもりで？」

富山が問い詰めるように校長に言う。

「・・・」

「生徒達を、一度家に帰しましょう」

それが校長の決断だった。

「陽の奴・・・どこ行っただ・・・？」

真がパソコンをつつきながら呟いていると突然ボタンとドアが開いた。

「陽ッ！どこ行って・・・」

真が言いかけた時だった。

ガッ！

陽は真のむなぐらを勢いよく掴んだ。

「な、なにすんだッ！？」

「犯人は・・・！？」

「犯人は誰だかわかんねーのか！？」

陽は真に顔近づける。

その時の陽の顔は怒りに歪んでいた。

真は多少恐怖を感じていた。

「し、知らねえよ」

「・・・。そうか」

そう言うとき陽は真を離れた。

「すまん・・・」

「いいよ。気にしてねえ」

陽は少しふらつきながら自分のベッドの上に座った。

「陽。何か・・・あったのか？」

「・・・」

「明が、殺された」

陽は少しうつむいて答えた。

「！？」

「お前の言ってた事も嘘じゃねえみてえだ・・・」

「先生には言ったのか！？」

「ああ。石川が出てきてすぐ来るってよ……。一応俺はその部屋の人間じゃねえから帰ってきたがな」

「そうか・・・」

「なあ真・・・」

「何だ？」

「何で俺らのクラスの奴らが殺されなきゃなんねえんだよ・・・？」
真はその時、陽が目には涙を浮かべている事に気づいた。

「おかしいだろうがよ？ クラスは他にもあるし、第一殺す理由がわかんねえ・・・」

「陽・・・」

真がどう答えれば迷った時だった。

コンコン・・・

ドアを叩く音がする。

「山木君。真桜君。出てきてくれ」

真がガチャリとドアを開けると、富山がいた。

「富山先生・・・」

「玄関ホールに集合だ。荷物をまとめて来るんだ。わかったね？」

「あ、はい」

真が答えると富山は静かにドアを閉め、どこかへ行った。

「陽。荷物まとめるぜ」

「あ、ああ」

陽は制服の袖で涙をゴシゴシとふくと、すぐに真とともに荷物をまとめた。

「B組。全員そろいましたね？」

小島が集まった生徒を見渡す。

明らかに減っている。

生徒の数人は泣いていた。

恐らく殺された生徒の友人やルームメイトだろう。

李那もその一人なのだろう。

目から大粒の涙を流している。

「今回は本当に残念で悲しい事になりましたが、みなさん一度自宅に戻り、心と体を休めてください」

小島はそう言って生徒達をバス停まで引率した。

数時間後、真はやっとの思いで自宅に到着した。
懐かしい景色。

懐かしい家。

「ワンワン！」

「ジロウ！」

この犬はジロウ。

真の家で飼っているゴールデンレトリバーである。

毛並みもよく、よほどの事がないとほえないように教育されている。
つまりジロウにとって真、つまり主人が帰って来た事はこのうえなく嬉しい事なのだ。

真がジロウをなでていると家のドアがガチャリと開いた。

「真！」

「おうおふくろ！今帰ったぜ」

彼女は真の母、美代子^{みよこ}である。

美代子は真に駆け寄るとすぐに抱きしめた。

「うわ、な、なんだよッ！？」

「よく帰ってきた！先生から話は聞いてる・・・！無事でよかった
！！」

美代子は泣いていた。

「おふくろ・・・」

美代子の気持ちを察した真は美代子の背中に手を回した。

「無事だよ。ありがとうおふくろ・・・」

その後、真は久々の自宅へと戻っていった。

「おふくろ、何か腹減ったな。飯作ってくれねえか？」

「なに言ってるんだい。帰るなり。今作ってる所だよ」

さっきの涙はなんだったのかとつい思ってしまう。

「おお、真。お帰り」

今では父、光春^{みつはる}がソファに座って新聞を読んでいた。

「ああ。親父。ただいま。」

真の家は真、光春、美代子の三人暮らしだった。

光春は顔に出さないが、真がいない日々は二人にとってさみしいものだった。

「なあ親父、おふくろ」

「なんだい？」

「帰っていきなりなんだけどさ……。明日行きたい場所があるんだ。バス代くれない？」

「行きたい所って……。どこよ？」

「Z県」

「そんな所まで行くのかい？」

「ああ。どうしても……。調べたい事があるんだ……」
そう。

真が調べたい事とは他ならぬあの事件。

Z県高校生連続惨殺事件の事だった。

続く

第八章「過去」

ガタンゴトンガタンゴトン・・・！

電車の揺れる音が聞こえる。

真は今、乙県の白風町に向かっている。

あの事件があった学校がある町だ。

（ここに・・・何かヒントがあるのかも知れない・・・。）

真は少し緊張していた。

この事件について知ると言うことは、事件の真相に近づくということだからだ。

別に自分じゃなくても良いと言うのはわかっているのだが、この事件はどうしても解決しなければならぬ。

そんな気がしていた。

真は駅に到着すると、地図を開いて学校を探し始めた。

「えっと、白風校はと・・・」

案外地図上では白風高校は簡単に見つかった。

真は足早に白風高校に向かった。

白風高校は駅から10分程度でたどり着くことができた。

事務室で許可を取り、校長室へと入っていった。

トントン

「入りなさい」

真がドアをたたくと中からおじいさんの声が聞こえた。

「はい」

真はガチャリとドアを開け、中へ入っていった。

「・・・。誰だね？」

「えっと、山木真と言います。今日は校長にお聞きしたい事があります」

「私に答えられる事なら出来る限り答えましょう」
校長は机の上のコーヒーを少しすすった。

「まあ座りなさい」

校長は部屋の真ん中のソファ―に座った。

「はい」

真は校長と向かい合うようにソファ―に座った。

「それで、聞きたい事とはなんだね？」

既に校長は真が聞きたいことを察している様子だった。

「はい。高校生連続惨殺事件の事です」

真がその言葉を口にした瞬間、校長の表情が変わった。

「やはりな。君の目を見ればわかる」

「え？」

「君の目は真実を追い求める者の目だ」

「君はもしかすると、最近世間で騒がれている2回目の惨殺事件の起こった学校の生徒ではないかな？」

（もう世間には知れ渡っているのか・・・）

真は家に帰ってから、新聞もテレビも見えていないため、知らないのは当たり前だ。

「良いでしょう。君が何をしようとしているかはわからないが、出来る限り話そう」

校長の話す内容はこうだった。

まず、C組の青田亮太あおた りょうたという少年が殺害された。

学校はすぐに警察に連絡したが捜査は難航した。

そしてまた1人、また1人と残酷な死に方をしていった。

死体は全て、原型をとどめているのは首だけだった。

しかし、奇妙な事に出席番号最後の少女、渡部玲奈わたべ れいなは殺害されなかった。

彼女は唯一の生き残りだった。

しかし彼女はあまりの恐怖に自分の部屋に閉じこもっていた。

誰の話も聞かず、誰とも話さない。

ただし、母親とだけは会話した。

あの事件の事以外なら・・・。

彼女は母親の話だけを聞き、母親の持ってきた料理だけを口にした。結局警察もマスコミも彼女からは何の情報も得られなかった。

「渡部玲奈・・・」

校長の話聞き終わった真は校門の前にいた。

真相はつかめていない。

「とりあえず、彼女の家に行ってみるか」

真はそう呟くと校長にもらったメモを取りだし、開いた。

校長は何かてがかりがつかめるかも知れないと言うことで彼女の住所を教えてくれたのだった。

真は早速渡部玲奈の家を尋ねる事にした。

何も話さないとは思うが今はなりふりかまっていられない。

何か、何か少しでも手がかりが欲しかった。

渡部玲奈の家は学校から少し離れた場所にあった。

他の家と違う緑色の屋根が印象的だった。

ピンポン！

真はインターホンを押した。

押してからしばらくすると中から「はい」と声が聞こえた。

ガチャリとドアが開き、中から中年の女性が現れた。

恐らく美奈の母だ。

「あの、どなたですか？」

「山本 真と言います。少し聞きたい事があるのですが・・・」

「大体予想はつきます。外ではなんですので中へどうぞ」

「はあ、失礼します」

真は彼女とともにリビングへ入った。

「あの・・・」

「殺人事件の事でしょう？」

「は、はい」

「と言うことは、あの学校の生徒さんね？」

「はい」

「私は事件についてはよくわかりません。ですから、娘に聞きに来たのでしょうか？」

「あの子が何か話してくれるかどうかはわかりませんが・・・」
そう言うと、彼女は真を2階へ連れて行った。

2階に行くと、すぐにドアがあった。

どうやらそこが玲奈の部屋らしい。

トントン

「玲奈、お客さんよ……」

「来ないで」

中から少女の声がする。

「来ないですよ。どうせまたあの事について聞くんでしょう？もう沢山よ！」

「お願いだ。君なら何か知っているかもしれない」

真がそう言う中からドアに何かをぶつける音がした。

[illegible]

ドンドン！と何回も何かをぶつける音がした。

「歸つてよオオオオツ……！」

玲奈は真を完全に拒絶した。

続く

第九章「玲奈」

「……。」

真は少し戸惑っていた。

多少精神は錯乱しているだろうと予想はしていたがここまでとは思っていなかったからだ。

今、真は美奈の母親とリビングに戻っている。

「ごめんなさいね……。落ち着くまで、待ってくれるかしら？」

「ええ、別に……。おかまいなく……。」

「あ、そういえば私の自己紹介がまだでしたね。わたべ ゆうこ渡部夕子です。」

夕子はペコリと頭を下げた。

「そろそろ、様子見て来ますね」

そう言うのと夕子は2階へ上がっていった。

「……。何故殺されなかったんだ……。？」

真の中に疑問が生まれた。

出席番号最後の彼女が何故殺されなかったのなら同じ出席番号最後の真も殺されずにすむのではないか……？

そんな考えが脳裏をよぎった。

「まさか……。な……。」

真が考え事をしていると、上から夕子が降りてきた。

「あの、玲奈が少しだけ話してくれるそうです」

「あ、そうなんですか……。」

真はそう言うとともに2階へ上がった。

「あの……。」

「開けないでッ！」

真がドアに手をかけようとする中から怒鳴り声が聞こえた。

「良いわ。聞きたいことは大体わかってる」

「あ、ああ。このさいだから単刀直入に言うぜ。犯人は誰なんだ……。？ 何か思い当たることはないか……。？」

聞いた後、流石に真も単刀直入すぎたと思った。

「ええ。あるわよ」

「!？」

「誰だッ!? 誰なんだッ!?」

「そうね……。でも言えないわ。確定してるわけじゃないもの。まあ可能性は九割ってとこね」

「……………」

「でも、これだけは教えておくわ。生徒名簿をよく確認する事ね……」

「……………」

（生徒名簿……?）

真は少し疑問に思ったが、後で考える事にした。

「後もう一つ……。君は何故殺されなかったんだ？」

「さあね……。あっちに殺したくない理由があったんじゃないかしら？」

「……………」

電車内。

ガタンゴトンガタンゴトン……

あの後、玲奈はあの時の事を思い出したらしく、また発狂し始めた。これ以上は聞けそうにもないので真はとりあえず帰ることにした。

（それにしても……………）

（生徒名簿って……………?）

「まさか……………」

真の中にとんでもない考えが脳裏をよぎった。

その頃……。

陽は自宅の自分の部屋でインターネットをしていた。少しでも情報を手に入れようとしていたのである。しかしなかなか情報が手に入らず、いらついていた。

「チッ……。どれもガセネタばっかだな……」

陽は舌打ちをすると、パソコンの電源を切った。

かれこれ3時間以上パソコンの前に座っていたため、肩や腰が痛い。陽が立ち上がって部屋から出ようとするとなにやらガサガサと音が聞こえる。

「……?」

「出席番号……26番……!!」

「!?!」

どこからか声が聞こえる。

陽は咄嗟に身構えた。

「そうか……。俺の番か……!?!」

その事に気づいたとたん、陽の顔は恐怖ではなく、怒りに歪んだ。憎んでいるのだ。

恨んでいるのだ。

憎悪を抱いているのだ。

陽にとってその何かは「恐怖」ではなく「恨むべき者」。

明を、クラスメート達を殺した「恨むべき者」なのだ。

「出てこいよ……!」

陽がそう言った時だった。

ガシッ!

腕を何かに掴まれた。

「!?!」

陽は咄嗟に後ろに振り向いた。

そこで陽の手を掴んでいる何か……。

陽はその顔に見覚えがあった。

「お、お前……は……!?!」

陽がその見覚えのある顔に動揺した瞬間だった。

「ッ!?!」

何かはガブリと陽の腹部に噛みついた。

「真に……!真に伝えねえと……!?!」

陽は必死にポケットの中の携帯を取り出し、真の携帯にダイヤルした。

「おい・・・真!!」

「陽。どうした?」

幸い、携帯はすぐにつながり、真の声が聞こえた。

「わかつ・・・たんだよ・・・」

「何がだよ?」

陽の意識は少しずつ薄れていく・・・。

何かはまだ陽の腹部に噛みついている。

「犯人・・・が・・・だよ」

「お、おい!まさかお前・・・!?!」

「犯人は・・・あい・・・つだ・・・!」

「わ、わかんねーよッ!今お前どうなってんだよ!?!まさか・・・もう・・・!」

「・・・り・・・」

もう真の携帯に陽の声は聞こえない。

「おいッ!陽ッ!聞いてんのかッ!?!」

陽はその場にドサリと倒れた。

真の携帯にもその音が聞こえる。

「陽!?!」

何かは陽の腸を喰い始めた。

今までと同じように・・・。

「おいッ!陽ッ!大丈夫かよッ!?!おいッ!」

陽の近くに転がっている携帯から真の声が響く。

しかしその声はもう陽には届かない。

「シ・・・ン・・・」

何かは陽の携帯を拾い上げた。

「おいッ!陽ッ!!!」

グシャッ!

「ウル・・・サイ」

何かは片手で陽の携帯を握り潰すと、窓を飛び越えてどこかへ行つてしまった。

「!？」

ツーツーツー

「陽・・・？」

「誰だよ・・・あいつって・・・？」

真は自分の部屋で呆然と立ちつくした。

続く

第拾章「人格」

あれからすぐ、真は陽の家へ向かった。

その時は既に警察が駆けつけており、中には入れなかった。しかしこれだけはわかった。

陽は殺されたのだ。

陽の言う、あいつに。

そのあいつが誰なのか・・・？
り・・・？

真は陽の最後の言葉を思い出していた。

真にはまだわからなかった。

真は家に帰ると、しばらく泣いた。

陽や太一、親友が、クラスメイトが次々に殺されていく。

もう出席番号最後の自分しか残っていないのかもしれない。

そんな事も考えた。

しかし悲しんでいる場合ではない。

解決しなければ・・・。

真は急いで生徒名簿を探した。

「確か入学式でもらったはずだ・・・！」

1年以上前の物だが捨てたおぼえはない。

とにかく見つけなくてはならない。

陽が最後にくれたヒント「あいつ」と「り」。

そして玲奈がくれたヒント「生徒名簿」。

この2つの指す真実は、クラスの中に犯人がいる。

それしかなかった。

「あ、あった・・・！！」

真は1番から順番に見ていった。

「浅木・・・園部・・・浜田・・・・・・陽。」

「え・・・？これって・・・？」

真は何かに気づいた。

何故見落としていたのだろう。

簡単な事だった。

何故誰も気づかなかったのだろう・・・。

「嘘・・・だろ・・・？」

真はバタリとベッドに倒れ込んだ。

「ありえねえ・・・よ」

翌日。

真は朝早く起き、身支度を始めた。

「これは持ってた方が・・・良いよな」

真は部屋にあったカッターを取り出した。

真は刃が出るかどうか確認すると、ポケットにしまった。

護身用だが、あまり役に立つとは思えない。

ないよりはマシだが・・・。

「よし」

真は1階に降りた。

美代子が台所で朝食を作っている。

「あら、真。おはよう」

「おはよう」

「朝食、できてるわよ？」

「ありがとう。でも食欲わかないよ」

「そう」

真はそう言うと玄関へ向かった。

「どこかへ行くの？」

「ああ。ちよつとな」

「それとおふくろ・・・」

「何？」

「ありがとな・・・」

真はそう言い残すと靴をはき、外へ出ていった。

「真・・・？」

（絶対に逃げない。どうせ逃げられないのなら、立ち向かう！）
真は近くの廃屋に向かっていた。

あそこなら誰にも迷惑がからないからだ。

そう、真は闘うつもりなのだ。

陽を、クラスメート達を殺した何かと。

そして真は知っている。

その何かが何なのか。

真は廃屋につくとすぐに中に入った。

本当はいけないのだがやむをえない。

中はかなりボロボロだった。

壁の所々がはげ、家具という家具がほこりをかぶっている。

真はここで待つつもりなのだ。

「あいつ」が来るのを。

その「あいつ」は真のよく知っている人物だった。

「あいつ」・・・いや、彼女はいつもそばにいた。

まさか彼女だとは思わなかった。

信じられない。

信じたくない。

しかし玲奈の言葉が何度も蘇る。

生徒名簿をよく確認する事ね・・・。

そして確認した生徒名簿。

そんな事を考えていると、ガチャリとドアがあいた。

「！？」

「真・・・」

李那だ。

「李那・・・」

「どうしてこんな所にいるの？」

「聞きたいのはこっちだよ。お前こそ何でこんな所に来るんだよ？」

「そ、それは・・・」

李那がうつむく。

「少し昔話をしようぜ。お前と出会った時の話を・・・」

「半年前だ。お前と出会ったのは。廊下で出会って、いきなり話しかけてきた」

「うん」

李那はコクリと頷く。

「それからお前はよく俺と陽と話すようになったよな？」

「うん」

「半年前だぜ・・・」

真は懐かしそうに言う。

「半年前、乙県で何があったか知ってるか？」

「え・・・？」

「連続高校生惨殺事件だ。あるクラスの生徒達が出席番号順に殺されていったんだ」

「今回の事件とそっくりだよな・・・？」

「それが・・・何なの・・・？」

「李那・・・。お前、出席番号何番だ？」

「32番・・・だよ」

「おかしいんだよ・・・」

「え？」

「ないんだ。生徒名簿には・・・」

真の目から涙がこぼれる。

「32番なんて数字はどこにもないんだッ！！出席番号の最後は31！俺なんだッ！！32番なんてないんだよッ！」

「存在しない出席番号、半年前の事件、そしてお前・・・！犯人は・・・お前しか考えられないんだ・・・」

真は大粒の涙をこぼしながら近くの机を叩いた。

「俺の言ってる事が嘘ならそう言ってくれ・・・」

「やっぱりすごいよ」

パチパチパチパチ・・・！

李那が突然拍手をし始める。

「まさかここまで推理できるとは正直思っていなかった」

「ふふふ・・・」

李那が笑い始める。

「そう、全部私。白鳳校の事件も、この事件も・・・。全部私」

「正確には、そうじゃないんだけど・・・」

「え・・・？」

「もう1人の・・・私」

「な、何言って・・・」

動揺している真とは裏腹に、李那は淡々と話し続ける。

「知ってる？多重人格って。自分の中にまったく違う人格ができちゃう精神病」

李那はそつと自分の胸に手を当てた。

「居るの。私の中にももう1人。私じゃない私。言ってる意味、わかるかな？」

「前の事件の時、私は何度も止めた。誰も殺さないで。でも止まらなかった」

「どうしてもタベタイタベタイって・・・。言うことを聞かないの」
李那の目からも涙がこぼれる。

「だから約束したの。クラスのみんなを喰べたらもうやめるって。でも約束は守られなかった」

「お、おい。ちょっと待てよ。でもお前は生徒じゃなかったんだろ？何で学校に？」

「私は親もいないし、学校にも行けなかったから・・・。人並みの事がしたかったの」

「だから少しの間だけでも、バレルまでの時間だけでも、学校と言う空間にいたかった」

「集団って不思議だよな。知らない内に1人増えても、知らない内に減ってもあまり気づかないんだよ？」

「でももう終わりだね。真以外はみんな私が喰べてしまった。前の時だってそう」

「でも、お前は渡部玲奈だけは殺さなかった。何故・・・？」

「玲奈ちゃんね、私の唯一の親友だったの。私が生徒じゃないってわかってても、仲良くしてくれた。だから無理矢理私を止めたの。

私は、真だって喰べたくない。だけど・・・」

「もう、ダメ」

「え・・・？」

「多分、この後玲奈ちゃんも喰べちゃうかも」

李那の表情が変わり、真を睨みつけた。

その顔はさっきまでの悲しい李那の顔ではなく、獲物を前にした肉食獣のような・・・

そんな顔だった。

続く

第拾壹章「連鎖」

「出席番号31番、山木真・・・」

李那は真にジリジリ近づいてくる。

「李那・・・！」

「イタダキマス・・・」

バツ！

李那は真に飛びかかってきた。

真はそれを避けると李那の後ろに回り込んだ。

「李那。自主しよう！」

真がそう言っても李那は耳を傾けない。

もう真を喰べる事しか考えていないようだ。

「シン・・・シン・・・！！！」

「糞ッ！聞こえねーのかよ！？」

李那は真にまた飛びかかってきた。

今度は真も避けきれず、左腕を噛みつかれてしまった。

「あ・・・ッ！！！」

真の左腕に言いようのない激痛が走る。

李那はすぐに左腕を離した。

左腕からドボドボと血が流れている。

李那は倒れた真の腹部に噛みつかうとする。

「ッ！！！」

真は右にゴロリと転がると、すぐに立ち上がった。

そしてそのまま李那とは逆方向に逃げようとした。

しかし李那は大きく跳び、真の逃げようとした方向に着地した。

「！？」

「シン・・・シン・・・！！！」

真は後ろに退こうとするが、足が震えて思うように動かない。

「う、おおおおおッ！！！！！！！」

真はポケットの中からカッターを取り出し、刃を出した。
ズブリ

「!？」

カッターが突き刺さる感覚。

真はカッターを李那の心臓部に思い切り突き刺したのだ。
思い切り。

「かつての親友」に向かって・・・

いや、「かつての親友」ではない。

真にとって彼女は今でも親友なのだ。

そう、今この瞬間さえも・・・。

突き刺さったカッターの先からかすかに感じる体温。

それは間違いなく李那の物だった。

証拠はないがそう感じられた。

真はどこかでこの人物が李那ではない他の誰かであつたら・・・

そう考えていた。

しかしカッターの先から伝わる体温は確かに彼女の物だと感じた。

真の目からまた涙がこぼれた。

「真・・・」

李那のかすれた声が聞こえる。

気がつけば李那の目からも涙がこぼれていた。

李那の心臓部からは血が流れ、その血がカッターの刃をつたわって
したたり落ちていく。

「ありがとう・・・」

そう言うと李那はそっと目を閉じた。

ありがとう・・・。

そう言った李那の顔は、何故か笑っていた。

8年・・・。

あの日からもう8年の歳月が過ぎた。

真はその後、警察に自主した。
当然だ。

犯人とは言え、殺人を犯したのだ。
自主するのは当然の事だった。

全ての理由を説明し、決まった判決は5年間の有期懲役。

犯罪ではあるが事件を解決した事には変わりない。

本来なら真の言うことなど信じてもらえるはずがない。

しかし真が殺害した山本李那の検死の結果、体内から人間のものと思われる肉片、臓器などが検出された。

これが証拠となり、真の刑も軽めで済んだのだ。

真は釈放されてからは医者になろうと日々努力した。

理由はどうあれ、人を殺してしまったのだ。

だからせめて人を救う仕事がしたいと考えたのだ。

そして真はついに今年医師免許を取った。

努力の成果である。

真は今アパートで一人暮らしをしている。

不便な所は特にない。

1部屋しかないが、気に入っている。

1つの部屋だけで暮らしていると学校での寮生活を思い出すのも気に入っている理由の1つかもしれない。

真は部屋に帰ると安堵のため息をついた。

ついに医師免許を取ることが出来たのだ。

色々と疲れているせいかすぐに眠くなった。

真は布団をひくとすぐに寝ようと思った。

真が布団を用意しようと思ったその時だった。

ガサガサ・・・

「鼠・・・か？」

物音が聞こえる。

一瞬、真はある事を思い出した。

「まさか・・・な・・・」

しかし背後から感じる威圧感は半端な物ではなかった。
真は恐る恐る振り返った。

「李那・・・！？」

一瞬そう思ったが違った。

李那ではない。

李那ではないがああの時の感じと同じ。

「そうかよ・・・。そういう事かよ・・・」

李那はもういない。

しかしあの日感じた狂気は今もここにある。

「イタダキマス・・・！」

連鎖する狂気。

連鎖する恐怖。

連鎖する事件。

この事件は、まだまだ終わらない。
今始まったのかも知れない・・・

第拾壹章「連鎖」(後書き)

既に書ききっていたとはいえ一週間程度で終わると思っ
ていました^^;

ここまで読んで下さった読者の皆様ありがとうございます。
よろしければ評価感想等をいただければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8760e/>

美味なる純血

2011年10月4日21時08分発行